

## 1. カンファレンス概要

1. 1. 名称 : International Conference: The Many Faces of Camille Saint-Saëns

1. 2. 開催日程 : 2016 年 10 月 7、8、9 日

1. 3. 開催地 : ルッカ Lucca (イタリア) Complesso Monumentale di San Michele

1. 4. 主催者 : ルイジ・ボッケリーニ全作品研究センター(ルッカ)

Centro Studi Opera Omnia Luigi Boccherini (Lucca)

: パラゼット・ブル・ザーネ(フランス・ロマン派音楽センター)(ヴェネツィア)

Palazzetto Bru Zane – Centre de musique romantique française  
(Venice)

## 1. 5. 内容

今回のカンファレンスを組織した団体に関して、パラゼット・ブル・ザーネに関しては 19 世紀フランス音楽に関する楽譜・研究書の発行、あまり取り上げられることの無い作品の演奏・録音、そして今回のような研究会・講演会の組織等の啓蒙活動を意欲的に行っていることで知られている団体である。ルイジ・ボッケリーニ全作品研究センターもその名の通り音楽学の研究所であり、プッチーニの生地ルッカを拠点に、ボッケリーニだけにとらわれない音楽史の各時代、各地域の諸問題に関しカンファレンスを企画し、その成果を順次公刊している。今回もルッカの元修道院を改装した文化センターにて開催された。建物には HIS(イエズス会)のマークがあるなど歴史を感じさせるものであった。交通は少し不便であったが、カンファレンス中はホテルとカンファレンス会場との往復であり、ちょっとした時間に散策するには中世さながらの城壁を残すこじんまりした都市が丁度よく、趣深かった。陸の孤島である分、静かな環境でカンファレンスに集中できる良いシチュエーションであった。

このような団体が活動を盛んに行う中で今回サン=サーンスに限定したカンファレンスが行われることになったが、これは大変珍しく、世界のサン=サーンス研究者が集まるというのは貴重な機会なのでぜひ応募させて頂き、有難く発表の機会を頂いた次第である。しかし、やはりサン=サーンスを専門にされている方は少なく、フランス音楽の他の研究分野からサン=サーンスと関連する点に関して発表される方がほとんどであった。懇親会のようなものは無かった代わりに、お昼は皆で用意されたレストランに移動して一緒に食事を取ったので、そこで有意義な議論、会話を行うことができた。

日程は三日間で、基調講演が二つと各発表者の発表がそれぞれ内容に応じてグループ分けされて各セッションを構成していた。各セッションの題目は、作曲家サン=サーンス1並びに2(室内楽)、異国趣味と東洋趣味1並びに2、サン=サーンスと劇、ヨーロッパを巡るサン=サーンス1並びに2、『ジュ・ペルレ』であり、ヴァラエティに富んでいたが、1セッション(3発表)日本関連のものが固まったのが驚きであった。音楽学専門の研究者だけでなく、ピアニストやハープの学生らの発表もあり、演奏家視点の興味深いものであった。

## 2. 自身の発表に関して

### 2. 1. セッション名: Exoticism and Orientalism (I)

### 2. 2. 発表タイトル: Saint-Saëns et ses œuvres littéraires sur le Japon

### 2. 3. 発表要旨:

今回の発表では、「サン=サーンスとその日本に関する文学作品」というタイトルで発表させて頂いた。オペラ=コミック《黄色い皇女》(op.30、1872 初演)を交えた発表が私のセッションに既に二つあるので、違うトピックにしてほしいという主催者側の希望を受け入れたためである。しかし、サン=サーンスに限定したカンファレンスというのは大変珍しく、世界のサン=サーンス研究者が集まるというのは貴重な機会なので、文学作品だけでなく、オペラ・コミック中の日本語歌詞や日本関連の文学者との交流も含めて文学的な影響についても発表させて頂いた。内容的には少し盛りだくさんで、早口に話してぎりぎり制限時間に間に合う感じであった。

まず、《黄色い皇女》に関しては、登場人物のレナが朗唱する日本語歌詞は当時の日本学研究者のレオン・ド・ロニが編纂した『詩歌撰葉』(1871)に載せられた万葉集の和歌であることを指摘させて頂いた。また、合唱によって歌われる日本語歌詞は何気ない日常会話のフレーズに見えるが、実は修正されており、修正前と後では発話の人物が異なってくる(コルネリスが朦朧とした意識の中でレナの歌を聴くのか、コルネリスの純粋な幻聴か、の違い)のため、大きな意味を持つことを分析させて頂いた。

次に、『気取りのない詩』(1890)に関しては、母親を失ったショックによる漂泊の旅の中で書かれ、この時期がそれまでのユゴーから高踏派へのサン=サーンスの嗜好の変化に当たり、高踏派の美学が彼の詩に反映されていることを指摘させて頂いた。特に「富士山」の詩においてはサン=サーンスはステレオタイプな日本趣味ではなく、むしろ高踏派の美学を体現する存在として孤独な自分と重ね合わせていることを分析させて頂いた。「日本」の詩に関しては東洋趣味で有名な作家ジュディット・ゴーチエとの関係を指摘し、近代化によって古き良き文化を失いつつある当時の日本をサン=サーンスが憂いていたことを説明させて頂いた。

当時パリ在住の日本人文筆家、元吉清蔵とサン=サーンスが知り合いだったことも手短かに紹介させて頂いた後、未刊の長編詩『鏡』(1912)について説明させて頂いた。アドルフ・ブリッソン夫人の求めに応じて書かれたこと、サン=サーンスが創作の際に参照したとされる挿絵付きの本に関し、ジュディット・ゴーチエの『日本』が相当すると考えられると述べさせて頂いた。また、この詩においてサン=サーンスは日本人の精神性に惹かれており、彼の日本趣味が単なる美術愛好の段階から深化していたことを指摘させて頂いた。

結論としては、サン=サーンスの日本趣味に関して、彼にとって伝統的な日本が一種の理想郷であったこと、その内面的な静けさを求める態度が高踏派の美学に通じること、またその性格から彼の公的生活である音楽創作よりむしろ内的生活である詩作において発露したこと、更にこの静けさを求める点において彼の中で日本が他の東洋の国々とは違う特別な位置を占めていたことを述べさせて頂いた。

## 2. 4. 質疑応答

聴衆の反応としては、未知なことが多かったようで、発表終えての司会者(シュテーゲマン先生)の第一声もそうであった。私と同セッションでのある発表者は、事前の発表要旨において、《黄色い皇女》中の「うつせみし」の歌が純然たる創作であると書いておられたため、それを訂正し、正しい知識を研究者の間で共有するために私の発表に説明を追加させて頂いたが、当然本人にとっては寝耳に水となってしまう、急遽発表内容の修正を求められ大変そうであり、大変申し訳なく思った。よって質問はシュテーゲマン先生からの《黄色い皇女》における日本音楽の影響についてのみであったが、シャルル・ルコックとの書簡における議論で、当時彼らは孔子時代から存在する中国の音階を用いたという認識であった旨を報告させて頂いたところ、関心を引き、笑いを誘っていた。今回の発表は本来文学面でのアプローチであったが、やはりシュテーゲマン先生を始め参加者は、日本人から見て《黄色い皇女》が本当に日本の音楽なのかどうかを確認しておきたかったのであろう。

## 3. 他の発表の感想

今回のカンファレンスにおいては、英語、フランス語の他に開催地であるイタリア語が発表言語として採用されていた。しかし、イタリア語の発表は砕けた表現を用いさせて頂くと、「ガラパゴス化」していた。サン=サーンスの研究に関して、英語母語話者は調査のためにフランス語を勉強し、仏語母語話者は外国での発表のために英語を勉強するため、英仏でのコミュニケーションが自然と成り立っていたが、イタリア語の発表においては会場から適切なコメントが得られず、議論もはかどらず、イタリア語話者の内で完結してしまっており、発表者にとってもつたいないことであった。

今回アジア圏からの参加者は私一人であったが、遠方から来られた方が一人いた。英仏語とも自由ではないので、発表ではあらかじめ用意した英語原稿を読み、質疑応答は同行の通訳者をお願いされていたが、少し奇異な印象を抱いた。実際、質疑応答時は質問者とのやり取りがかみ合わない場面が見られた。またこうなると、「お客様」扱いということで手加減してはもらえるが、対等な研究者としては扱ってもらえない印象を受けた。

また、このような複数日にわたるカンファレンスでは良くあることだが、自分の発表の時だけやってきて、終わるとさっさと帰ってしまわれる方がおられる。特に今回の場合、サン=サーンスが専門でなく、ご自身の専門研究にサン=サーンスを絡めて発表された方に多かったように見受けられる。カンファレンスの目的の一つは研究者のネットワークを作ることにある。もちろん人それぞれ事情や都合があるとは思いますが、休み時間、ランチタイムの何気ない会話が非常に重要である。特にイタリアでは昼休憩が2時間と日本では考えられないほどゆったりとした時間が流れるが、会話や議論をし、食事を取っているとあっという間に2時間を超して午後のセッションの開始が遅れていたのは如何にもイタリアらしい鷹揚な感覚であった。また、カンファレンスの最終セッションが終わって後、はい、さようならではなく、挨拶が欠かせない。権威のある先生に挨拶される方は多いだろうが、一番忘れてはならないのは、カンファレンスをオーガナイズしたスタッフ(研究者)へのねぎらいと挨拶である。海外生活がなく、初めて日本からフランス等でのカンファレンスに参加される方は郷に従ってのマナーに気を付けて頂きたい。そうでないと、良い印象を持ってもらえないからである。

そして、郷に入っては、といえば、話好き、議論好きなフランス人、イタリア人、沈黙は金ではない。他の方の発表の時も質問や議論に参加されることをお勧めする。今回のカンファレンスにおいて、サン=サーンスの幻想曲《アフリカ》に関して、「アフリカ大陸からのポストカード」と表現されたイタリア人研究者がいた。私は、サン=サーンスがタイトルをフランス語の Afrique や Africain(e)ではなく、あえてラテン語で Africa と表記しており、古代ローマ人にとっての狭義のアフリカすなわちカルタゴのことを指している、何故なら昔のチュニジア国歌が引用されているからだと指摘させて頂いた。確かにアフリカ大陸でも間違いではないが、「日本からのポストカード」を「アジアからのポストカード」と表現するようなもので、漠然としすぎる。(市販のCDのブックレットの表紙にはサバンナの写真を使っているものがあるなど、誤解も甚だしい。)発表者からは結局イタリア語で色々まくしたてられて残念ながら理解できなかったが、客席の諸先生方からは異論が出ず、それどころか終了後適切な指摘をありがとう、との言葉を複数の先生から頂いた。このようなちょっとした機会でも自説の正しさを確認すると共に、他の研究者と共有することができたのは有益なことであった。

#### 4. 今発表の成果、謝辞

今回、サン=サーンス一人にテーマを絞った珍しいカンファレンスが行われたことで、サン=サーンス研究者としては非常にありがたく、世界の研究者が一堂に会し、お互いの発表を聞き合っただけで最近の研究動向を知り、私個人としても自分の研究について知ってもらおうと同時にどのような反応が返ってくるかを確認することができたのは、自分の研究を進めていく上で、非常に有益であった。また海外において、ある意味陸の孤島の静かな環境で勉強漬けの3日間を過ごすことができたのは大変贅沢な時間であった。フランスとイタリアのコンセントの形状が同じと勘違いしてパソコンの電源確保に焦る失敗をしたが、友人のフランス人研究者にプラグを持ってきてもらうよう頼んで助けってもらったり、不慣れなイタリア語で一人旅を切り抜けたり、やはり海外に出るといっただけでも様々な面で自分の成長につながると感じた。このような貴重な機会を提供、または支援して下さいましたカンファレンスの主催者様並びに日本音楽学会国際研究発表奨励金選考委員会様、住友生命保険相互会社様に厚く御礼を申し上げます。



(会場内の様子)



(会場外観)